

建設省土木研究所 ○正員 島谷幸宏
正員 松浦茂樹

1. はじめに

都市域に人口が集中する過程で都市の人工化・コンクリート化が進み、都市内における自然空間は、しだいに減ってきている。また、石油ショック以降、人々の住環境に対する要望も、“うるおい”や“ゆとり”というように量から質へと変化しつつある。このような社会状況の中で河川は、自然を多く残した身近なイメージ資産として注目されるようになってきた。全国各地で河川環境を整備する事例が増えて来ているのはこのありわれであろう。

しかし、河川環境に関する研究の歴史は浅く、河川環境整備の計画理論については、未だ確固たるものではないと考えられる。ここでは、既述の河川環境の整備に関する事例を分析することによって、河川環境整備計画を立案する際の基本的な考え方を整理し、報告する。

2. 基本的な考え方の考え方

河川環境整備計画を立案する際の考え方を¹⁾どのような地域を対象とするのか²⁾という観点より整理すると、以下の3つに大別できる。

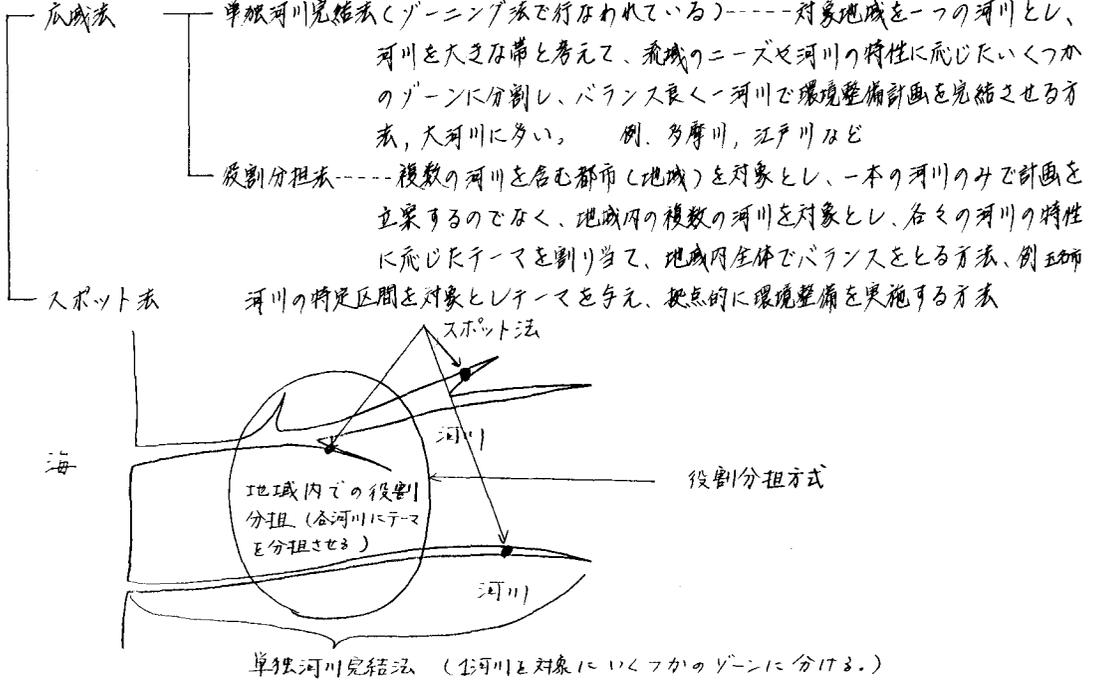


図-1 河川環境整備計画の3手法 (概念図)

対象地域の考え方がよって、以上3つの手法に分類したが、現実の計画では3つの手法に明確に区分けされるわけではない。たとえば、スポット表として整備された計画でも、立案者の頭の中では単独河川完結法、役割分担法に基づき検討されていたものもあろう。また同様に、単独河川完結法といっても、無意識のうちには近隣の河川の整備との関連を計画されることもあるだろう。このことを十分考慮した上で以上3つの手法に整理した。

単独河川完結法は、現在直轄河川の環境管理計画を立案する際に用いられている手法である。一つの河川内に色々な特徴を持つ場所があり、一河川で計画を完結させることが可能な大河川に通じた手法といえる。

役割分担法は、現在のところ筆者らの知るかぎりでは、玉名市の例などがほとんど行われていないが、都市内の複数河川を対象とし、各河川の特徴に応じて役割を分担させる手法であり、都市を中心に河川環境を考える場合には有効な考え方といえる。

ひろろん河川の環境整備は、都市あるいは地域との関わりで行なうものであり、単独河川完結法が都市との関わりを重視するとか、役割分担法が河川の条件を考慮外に置いている、というのではない。相対的にみて、単独河川完結法は河川を中心に河川環境を考えるのに適する手法で、役割分担法は都市を中心として河川環境を考えるのに適する手法、といえる。

点的な整備を行なうスポット法は、現在ひとつひとつ多く行なわれている手法である。単独河川完結法、役割分担法などの広域的な整備手法にくらべるとスケールは小さいが、スポット法の集積が全国に河川環境を向上させようという気運を醸成し作りあげてきていることは重要である。スポット法の積み重ねにより、ケレズつ日本の河川環境は向上していると言ってよいだろう。

3. テーマの考え方

広域法の一つのゾーン・箇所やスポット法は、キマツチフレーズとなるようなテーマを帯びて整備されることが多い。キマツチフレーズとなり得るようなテーマは、河川環境を整備する際の基本方針と考えることができる。これらのテーマは、実は河川の持つ親水機能の一部であり、それらの親水機能を強調あるいは向上させることによって河川環境の整備が実施される。以下に現在までの事例にあらわれたテーマのうち、河川の魅力をアピールする際に有効であると判断する7つのテーマをあげる。これら7つのテーマは互に重複する部分はあるが、現在行なわれている環境整備のテーマの考え方をおおむね網羅できると考えている。多くの河川環境整備の事例では、複数のテーマ（河川環境整備の基本方針）を組み合わせて実施している。

- ①「河道の特徴」----- 河川の砂州や分合流部など河道の特徴に焦点をあてる 例：嵐山 兵庫島崎新川
- ②「水」----- 水の存在を強調し、流れを作ったり、流量を増加工せる 例：犀川、元木山川
- ③「水とみどり」----- 河川を中心とした緑道公園 例：広瀬川（前橋市）、西川（岡山市）
- ④「川と生物」----- 動物や植物との共存を図る 例：楳野川（木更津）、石狩川（サケ回遊地）
- ⑤「川と歴史」----- 周辺の歴史的樹並や歴史性と調和させる 例：名敷川、白川（京都市）
- ⑥「川の風景」----- 河川の風景を重視した計画 例：白川（熊本）、太田川
- ⑦「川と活動」----- 親水活動を増進させる 例：博多川（煙ろう流し）、千代川（流しがな祭り）

筆者らは、現地調査によって、河川の魅力として「川らしさ」が重要であるという結論を得ている。以上、7つのテーマは、それぞれ「川らしさ」の一部と考えることができるであろう。7つのテーマの上位概念として「川らしさ」があり、その一部の具体的表現として①から⑦に整理、分類できると考えている。現在行なわれていないが、今後実施される可能性のあるテーマとして「川の音」「川の気候調整」などが考えられる。

4. おわりに

ここでは、河川環境整備計画の立案手法について対象地域の設定という観点より、広域法（単独河川完結法、役割分担法）、スポット法に整理した。またキマツチフレーズとなりうるようなテーマを7つあげ、その上位概念として「川らしさ」が重要であることを示した。今後、「川らしさ」について研究を深めていくつもりである。

参考文献：1)小栗幸雄：自然河川における水とのふれあい実態調査，第23回工本研究所発表会

2)馬場・島谷：都市域に望まれる河川像に関する研究（その1） 工本研究所資料 2111号

3)秋浦・島谷： ” ” ” ” 2223号

4)秋浦・島谷・小栗・園村田・渡辺： ” ” ” ” 2224号